

エディトリアル

地域医療振興協会 常務理事
豊頃町立豊頃医院/大津診療所 管理者兼診療所長 木下順二

2018年4月にスタートした新専門医制度も5年目を迎えた。19番目の基本領域として生まれた総合診療についても、その専門研修1期生が3年間の研修と専門医試験を終え、80名弱の少数ではあるが初の総合診療専門医が誕生した。

少子高齢化・2025年問題に加えて、2020年からの新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、医療環境を大きく変えた。病院での急性期治療に加え、発熱外来、在宅感染者のマネジメント、各地の医師会などを中心とした地域内での組織的対応など、総合診療の領域にも新たな展開が加わった。一度このタイミングで総合診療専門医の現状を総括してみようというのが本特集の企画意図である。

総論では医学教育分野の第一人者である北村聖先生から専門医制度の歴史的経緯から現状と今後の課題までを詳細に解説していただいた。各論では、まず総合診療研修プログラムの責任者の立場から井上陽介先生に新専門医制度とコロナ禍がプログラムと専攻医指導に与えた影響について解説していただいた。次に日本病院会や自治体病院の立場から小牧市民病院の末永裕之先生に病院総合医に求められる役割と新たな育成プログラムについてご紹介いただいた。地区医師会の立場からは松戸市医師会の和座一弘先生に、多岐にわたる医師会活動と総合診療医との関わり、活躍への期待について記していただいた。最後に大学病院の総合診療科の立場から奈良県立医科大学の西尾健治先生に、教室の立ち上げから大学の枠にとられない教育研修の実際を生き生きとご紹介いただいた。

各記事を拝読して、総合診療専門医に期待される役割が極めて広範囲に及んでいることを改めて実感した。その全てについて第一線の知識を維持し常時経験を積むことは不可能であるが、現場で求められる役割に応じて己の姿を変える柔軟性、未知の課題への好奇心、問題解決のための情報収集能力、多職種連携のための人的ネットワークの構築力といったことこそが総合診療医に求められる中核的特質・醍醐味ということだろう。それは必ずしも制度に則って研修していれば自然に醸成されるというものでもなく、必ずしも試験で評価できるというわけではないかも知れない。

このように多くの魅力に溢れ、多彩な活躍が期待される総合診療である。新しい専門医の活躍の広がり、総合診療の門を叩く若い医師の増加につながるものと信じている。